◇谷口さんこそ本物のＮＧＯ

鹿児島大学名誉教授　萬田正治

21世紀に入り、世界は大きな転換期を迎えている。今や20世紀をリードした欧米主導の市場原理・競争のパラダイム、それに基づく大量生産・流通・消費・廃棄型のシステムは行き詰まっている。自然も、民族も、宗教も多様性に富むアジアは元々共生と循環の世界観であり、このアジアのパラダイムが新しい21世紀の世界を切り開いていくのではないだろうか。熊本県職を退職後、単身でいち早くタイに渡り、これを地で行く谷口巳三郎氏は、まさに先見性に富む実践の人である。

谷口巳三郎という方は、一度お会いすると「その後脳裏から離れない人、気になる存在の人」である。毎年、海外実習でお世話になる鹿児島大学の学生諸君の多くが、帰って来ると谷口ファンとなる。魅せられて再び訪ねる女子学生もいる。谷口氏の古武士のような風格の中に、ゆるぎない信念と体中からほとばしり出る若い情熱に私はなぜか魅せられてしまう。

谷口巳三郎氏が一時帰国され、母校の鹿児島大学を訪ねられた折に、学生諸君を対象に講演をお願いしたことがあった。演題は「君は21世紀のパスポートをもらえるか」といういかにも挑発的で拝聴したくなるような魅力的なもの。教室をあふれ出るほどに集まった多くの学生を前にして、谷口氏はいきなり「君たちには何も期待していない」と切り出した。その言葉には悲痛なまで、若者への逆説的な期待感が込められていたことを、まだ若い学生諸君には見抜く力はなかったようだが、それでも反発を覚えながらも若者たちの国際協力への参画を鋭く迫る話に魅せられていったようだ。全身に力を込めて、21世紀の地球環境のこと、貧困なタイの農民・農村のことを体験に基づいて情熱的にしゃべる谷口氏の話に私は何度か涙がこみ上げてきた。

私が鹿児島大学在職のころ、ミャンマーをはじめて訪ねる折り、ミャンマーからの女子留学生に、「私がミャンマーに何をすべきか」と尋ねてみた。彼女は「お金より知恵が欲しい」と即答した。その時私は国際協力の原点を教えられた気がした。国際協力は一方側の価値観で始まるものではない。相手国の生活様式、文化、歴史などを尊重していくことから始まる。また富める者が貧しい者へ、先進国が後進国へ、というような不遜で傲慢なものでもない。お互いが先ずは人間として対等の関係にあるという当たり前のことを肝に銘じておかなければならない。その意味でお互いが友達になるという相互交流からスタートし、いずれ交流から信頼が生まれ、はじめて相互協力へとつながっていくのであろう。

ややもすると、この視点が欠けるため、政府やＮＧＯが推進する多くの国際協力事業は行き詰まっている。もちろん多額の援助金でお茶を濁すような安直な協力事業は論外である。その中にあって、県職を退職後、単身でタイに渡り、自らの意思と資金で農場を建設し、地についた国際協力をすすめる谷口氏の活動はより輝いて見える。その活動を綴った本著「熱帯に生きる」は、タイでの日々の暮らしの中から涌き出た実践日誌である。文章の隅々から谷口氏のタイの人々へ寄せるやさしさと慈愛を読み取ることができる。本著はこれから東南アジアへ赴く人々のための必読書ともなるであろう。

一時帰国された谷口氏と別れる際、私は「谷口さんこそ本物のＮＧＯです」と満身の力を込めて、握手したことを今でも鮮明に覚えている。

おわり

◇榎本正文

千葉県松戸私立松戸高校教諭

谷口先生、この度は春休みのタイに引き続き、熊本まで押しかけ、大変お世話になりました。生徒だけではなく私自身、先生の生まれた坂本村をはじめ、先生の御一族との出会いは大変得るものが多く、言葉では言い表わせないほどのものをずしりと受け渡されたような気持ちで熊本を後にしました。無理をしてでも出かけた甲斐がありました。生徒も口々に言っていたのですが、行く先々で生徒達のことを谷口先生が「私の孫です。私の一番弟子です。」と紹介されたことに一同驚きと同時に心より喜びを感じていたようです。改めまして生徒達をここまで育てて頂いたことに感謝申し上げます。私だけの力ではここまではとうてい無理だったと思っております。

熊本を後にした直後に鐘川千佳さん経由でリアムさんのことをお聞きしました。私たちが熊本で谷口先生と一緒に時を過ごしている間に北タイでリアムさんが、一番頼りにしていた谷口先生なしで最後の日を迎えようとしていたのかと思うと言葉をなくしてしまいました。わかっていたこととは言え、この現実を受け入れるには時

間が必要のようです。

この5月1日に春のタイと熊本の旅の報告会を行いました。そこでリアムさんとの出会いを人一倍大切にし、交流をしていた伊東瑞樹がその思いを悲しみに耐えながら参加してくれた人達に語る様は、人の心を動かさずにはいられないものでした。報告会をする前は、なぜリアムさんの死を人前で語らなければならないのかと整理がつかないようでしたが、語ることによってリアムさんの命を、リアムさんという女性が生きていたことを一人一人が心にきざむことができ、彼女の命を受け継ぐことができるのだと話し、瑞樹は立派にその役目を果たしてくれました。私もその話を聞きながら、若者がいかに親しいものの死を受け入れ、乗り越えようとしているのかを付きつけられ、考えさせられました。参加者も会ったことのないリアムさんを心に刻まれたことに疑いはないと思います。自分でいうのもおこがましいのですが、自分の気持ちをここまで素直に気持を込めて語れるようになった教え子に頭が下がる思いがいたしました。先生にも是非お見せしたかったです。保科さんもいらっしゃいましたのでお伝えいたしました。やはり今となっては一番気がかりなのは残されたメイちゃんのことです。今度先生にお会いした時に詳しく相談したいと思っておりますが、伊東瑞樹の方で何とかという気持ちが強く有る様です。私たちも是非経済的、精神的にも応援させていただけたらと考えております。とは言いましても一番身近にいらっしゃる谷口先生なくしては何も始まらないとおもいますので、先生のお考えをお聞かせいただけたら幸いです。

とはいえ、世の中は本当にどこへ進んでいるのだろうかというニュースばかりが届き、谷口先生のおっしゃっている人類はターニングポイントを曲がってしまったという言葉がより現実的になってきているようで仕方ありません。ただ、あきらめることなく教師として、日本人としてできることをやるのみと叱咤激励して日々が続いております。まだまだ先生から学ばせてもらわなければという思いでおります。今後ともよろしくご指導お願いいたします。早速、新入生がこの夏にタイに行きたいと申し出がありました。時期的には八月十七日あたりになるかと思いますが、決まりましたらまた連絡をさせていただきます。それではその時にお会いすることを楽しみにしております。それでは今日はこれで失礼いたします。

おわり